

氏 名	やなぎ さわ かず ひこ 柳 沢 和 彦
学位(専攻分野)	博 士 (工 学)
学 位 記 番 号	論 工 博 第 3718 号
学位授与の日付	平 成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	生活空間の構成に関わる空間図式の発達的研究 ——居住空間構成法および風景構成法の考察を通して——

論文調査委員	(主 査) 教 授 岡 崎 甚 幸	教 授 前 田 忠 直	教 授 高 橋 康 夫
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

人間の内的世界の諸特徴を解明し、それに適った生活空間を実現することは、安らぎや癒しなど盛んに人間らしさが求められる現代においては基本要件となる。本論文は、生活空間の認知や構成に先立ち普遍的で根源的な原理が存在すると考えられる、子どもの内的世界の空間図式を解明しようとしたものである。箱庭療法をヒントに考案された、居住空間構成法(1/50の家具、人形、モジュール化された様々な大きさの壁などをホワイトボード上に配置して、被験者に具体的な居住空間の模型を自由に作ってもらう技法)や風景構成法(まず画用紙の四周に枠を描く。そして「今から私がいうものを、一つ一つ唱えるそばからこの枠の中に描き込んで、全体として一つの風景になるようにして下さい」と告げ、「川」「山」「田」「道」「家」「木」「人」「花」「動物」「石」、そして最後に足りないと思うものの順で要素を描いてもらい、彩色をして完成させる技法)による作品群の詳細な分析を行うことで、その諸特徴を明らかにしている。全体は序章と結章を含め6つの章から成り立っている。

序章では、研究の背景とともに居住空間構成法、風景構成法という技法を概説し、あわせて目的を述べている。そして空間図式について、理論的な背景を押さえつつ本研究における定義を明らかにしている。さらに箱庭療法を含む各技法の位置づけを考察し、既往研究に対する本研究の位置づけを行っている。

第1章では、居住空間構成法における空間構成の発達の特徴を明らかにすることを目的として、同一幼稚園の園児46名を対象に述べ78回の幼稚園を作ってもらった実験を行っている。その発達段階の初期には機械的、均質、幾何学的、前ゲシュタルト的、自己中心的などの特徴をもつ空間構成であったものが、成長につれて作品が構造化し、家具類の組み合わせや壁による様々な囲いが出現し、最後には壁で明確に室や廊下を構成して全体を統括する作品になる過程を明らかにして、原初的、場の発生、囲いと場の混在、完全囲いによる場の統括、壁による全体統括という5つの発達段階を提示している。あわせて同一被験者の作品の推移、家具類の使用頻度、人形配置の特徴などの考察も行っている。

第2章では、第1章で考察された居住空間構成法における空間構成の発達の特徴が、描画における空間構成の発達の特徴とどのように対応しているのかということを明らかにすることを目的として、同様の園児たちの居住空間構成法の作品と幼稚園の描画との比較を行っている。居住空間構成法の発達の特徴と、スクリブルや円から始まり平面図の様式や地面を表す基底線に至るという描画の発達の特徴との対応関係を明らかにすることで、第1章で得られた知見に関して、一つの実験技法という枠組を越えてその一般化を行っている。

第3章では、風景構成法における空間構成の発達の特徴を明らかにすることを目的として、幼稚園児から大学生まで1080名を対象に実験を行っている。特に風景構成法の特徴である「枠づけ」に着目し、最初にまず描かれる川が「枠」に対して如何なる形式をとるのかを分析している。そして得られた類型に基づいて、空間構成の発達の特徴を明らかにしている。さらに第1章の居住空間構成法との比較を行い、幼稚園児に多い「此岸なしの川」が、内外空間区別の意識とともに描かれるようになることを明らかにしている。

第4章。この章は発達の知見の応用研究の一つである。ここでは風景構成法で得られた「枠」に対する川の種類の知見に

基づきながら、広重の風景版画の「杵」と川との関係の類型を抽出し、その空間構成の特徴を明らかにしている。そして広重が描く川の多くが、幼稚園児や小学校低学年児が描くものと類似することを明らかにして、子どもの特徴が広重の風景版画において基本的なものであることを具体的に示している。

結章では、各章で得られた空間構成の発達の知見をまとめるとともに、それらから判明した原初的包含性、列状性、正面性、原初的構造化、内外空間区別性（「此岸なしの川」の発生）、内外空間の構造化の展開という諸図式に関する知見をまとめている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、箱庭療法をヒントに考案された居住空間構成法や風景構成法による作品群の詳細な分析を行うことにより、生活空間の認知や構成に先立ち普遍的で根源的な原理が存在すると考えられる、子供の内的世界の空間図式を解明しようとしたものである。得られた主な成果は以下の通りである。

1. 居住空間構成法にもとづく幼稚園児による幼稚園の作品を分析し、その発達段階の初期には機械的、幾何学的、自己中心的などの特徴をもつ空間構成であったものが、成長につれて作品が構造化し、家具類の組合せや壁による様々な囲いが出現し、最後には壁で明確に室や廊下を構成して全体を統括する作品になる過程を明らかにして、原初的、場の発生、囲いと場の混在、完全囲いによる場の統括、壁による全体統括という5つの発達段階を提示した。
2. 幼稚園児による居住空間構成法の作品と幼稚園の描画との比較を行い、居住空間構成法の発達の特徵と、スクリブルや円から始まり平面図の様式や地面を表す基底線に至るという描画の発達の特徵との対応関係を明らかにした。
3. 幼稚園児から大学生までを対象にした風景構成法の分析を行い、画面の「杵」と描かれた川との関係を考察し、そこで得られた類型に基づいて空間構成の発達の特徵を明らかにした。さらに居住空間構成法との比較を行い、幼稚園児に多い「此岸なしの川」が、内外空間区別の意識とともに描かれるようになることを明らかにした。
4. 広重の風景版画の「杵」と川との関係の類型を抽出し、それらの多くが幼稚園児や小学校低学年児が描くものと類似することを明らかにして、子どもの特徴が広重の風景版画において基本的なものであったことを確認した。
5. 以上得られた知見に基づいて原初的包含性、列状性、正面性、原初的構造化、内外空間区別性（「此岸なしの川」の発生）、内外空間の構造化の展開という空間図式を明らかにした。

以上要するに、本論文は、発達の視点から人間の内的世界の基本的な空間図式を実証的に解明し、人間にとって真にふさわしい生活空間を実現するための有効な知見を提示するものであり、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成15年1月22日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。